

ここでの「川」とは、六文銭を握って渡る三途の川ではなく、四国第二の大河（流域面積比）で、最後の清流とも呼ばれる四万十川である。

前回の「げんかい」（2019年9月）投稿の拙文「川支掩留大用局」の続きである。前回は、土佐・中村局（現：四万十市）引受郵便物が途中の大用局で川支（かわづかえ）となって「川支掩留大用局」の遅延印が押され、隣局の田野々（現：大正局）に送達したカバーを紹介した。併せて明治20年代後半以降、局名や遅延理由を示した川支印は多くないことも記し、同時に『田野々局でも類似の川支印を使っていたのかもしれない。何せ隣局である』とも書いた。その“川のあっち側”の田野々局で使った川支印が、この菊梓無1½銭はがき（図1）に押されている。

田野々局の川支印は、朱で「川支延着／土佐田野々郵便局」（図2）と各々2行書きである。大用局の川支印より「延着」や「郵便局」と表示するなど意味が分かり易い事故印である。郵便局と表示した事故印（川支・雪支）の存在は数例しか報告されていない。

四万十川の対岸の峠を超えた先にある大用局を通過し、前回のカバーと対になる郵便物では

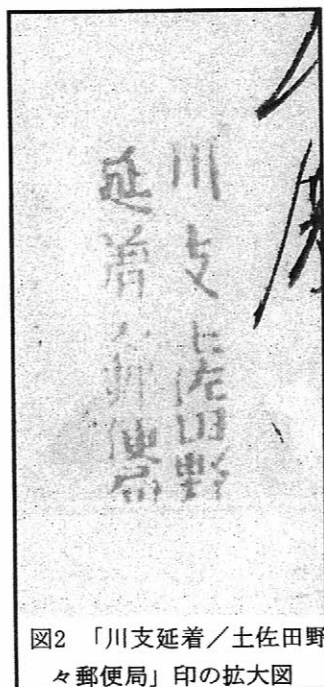


図2 「川支延着／土佐田野々郵便局」印の拡大図

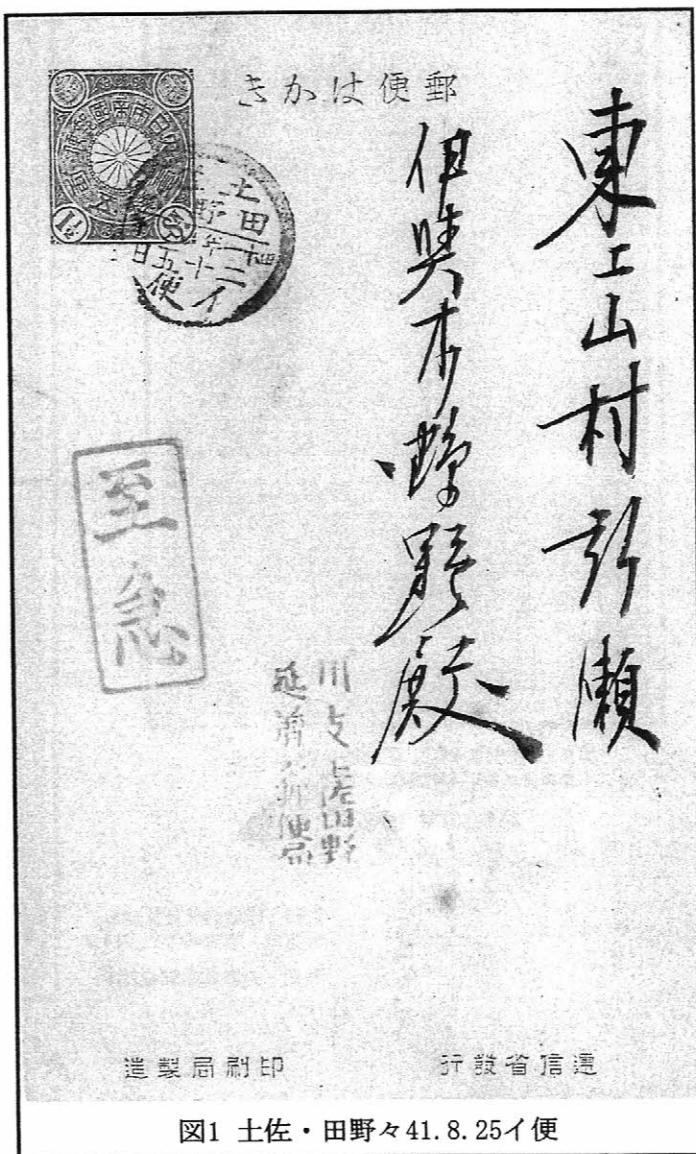


図1 土佐・田野々41.8.25イ便

なく、使用年も11年違うのは残念であるが、このはがきは明治41(1908)年8月25日に田野々局イ便で引受けた同一村内宛(同一配達局内)である。同一配達局内のため、配達(到着)印の押印がないのが惜しまれ、どの程度川支による遅れであったのか判らない。しかし、イ便による配達ができなかったのは確実であろう。川支印の他に差出人(村役場)が押した「至急」印は、川支印とセットになると皮肉である。明治41年8月25日は、東シナ海に台風と思われる低気圧があり、高知県は雨であった。その影響による四万十川の増水、川支と考えられる。

この「川支延着/土佐田野々郵便局」印は少なくとも明治30年代前半から使っているが、先に紹介した大用局以外、四万十川に沿った隣局である大野(現:十川)局でも「川支大野局」を同時期に使っている。当時の高知県幡豆郡内各局では、このように局名を記した事故印が主流だったのだろうか。事故印は日付印と異なり官給品でなかったはずで、最初に作った印を近隣各局が真似をしたことによるのだろう。

似たような例は信濃(長野県)・松本地方、備中(岡山県)などでも散見される。局名のない川支や雪支印は引受局、中継局、配達局の状況から使用局を判断することになるが、局名記載の事故証示印はその点、楽である。文献に現れた事故印印影を見ても、明治30年代以降使用の局名入り川支・雪支印は少なく、千円、二千元程度であれば、購入しても損はないと考えている。

この菊梓無1½銭はがきの宛名は東上山村弘瀬とある。弘瀬は田野々局の上流にあたり、当時100人強が住んでいた。明治40年頃の地図を見ると、四万十川の右岸に沿って田野々から幅2m程度(馬車通行不能)の道が弘瀬まで続いており、渡し船を使う箇所はない。途中、橋が架かっている場所が1ヶ所あるが、その地点が川止めにあったのだろうか。或いは、弘瀬は両岸に開けた地域であったから、受取人が左岸に住み、弘瀬で渡河できなかったのかもしれない。

明治から昭和前期(戦前)では、架橋できず渡し船による通行箇所が多数あった。福岡県でも筑後川など流量の大きい河川がある。これら河川が氾濫した際、川支印が使われた可能性は高い。福岡県をはじめ、九州での川支使用例は末尾記載の文献では報告されていない。川支印が使われていても局名表示があるとは限らないが、単なる「川支」や「川支延着」印であっても、福岡県内で使われていればカバー・はがき使用例のアクセントになろう。

局名なしの川支印がどこで押されたのかを推理するのは頭の体操でもある。また、当時の新聞や天気図などから事故印の押された状況を調べるのも面白いだろう。さらに、他の事故印にまで視点を広げてもいい。九州では雪支と日本海側での風波延着など船舶延着事故印が未発表とされる。福岡県内での雪支印の使用可能性は薄いと考えるが、壱岐・対馬や近くは大島(宗像大島)相互の遞送で、もしかすれば風波延着印や類似印が使われたのかもしれない。

参考文献:「川支掩留大用局」と「川のこっちとあっち側」投稿共通)

- | | |
|---------------------------------------|------|
| 土佐消印グループ編「土佐国 丸一型日付印」土佐消印グループ | 1976 |
| 篠田日出雄「明治期の事故証示印について(1~3)」『郵趣研究』69~71号 | 2006 |
| 澤まもる「増補版 小判切手 東京がおもしろい」鳴美 | 2013 |
| 「角川日本地名大辞典(高知県)」角川書店 | 1986 |